

第26回研究発表会は、2015年9月2日～4日、九州大学伊都キャンパスで開催されました。そのうち、2日～3日の2日間市民展示に展出する6団体に、「九州地域おける廃棄物・資源循環関連の市民活動」と題して活動内容を紹介いただく「市民フォーラム」を開催しました。今回、第7号では、その中から、19年前からコンポスト普及活動を行っているNPO法人「循環生活研究所」と、食品ロスの問題と子どもの貧困問題に取り組まれているNPO法人フードバンク北九州ライフアゲインから、当日のフォーラムの発表を本誌でも報告していただきました。

第26回研究発表会

誰でもできるコンポストで、小さな資源循環を全国へ ～半径2km圏内の生ごみの循環が元気な地域をつくる～

NPO法人 循環生活研究所 理事長 **たいら 由以子**

資源を使い果たす一方通行の現在の暮らしは、根本的に長期的に立ち行かなくなることは、すでに誰もが知っています。このことを、地域の人々が自分ごとと捉え、真剣に、具体的に社会を構築していくには、どうしたらいいのか。わたしたち循生研（循環生活研究所）は、循環のためのデザインがなされていない社会から、資源を活用する地域社会の構築が必要であると考えます。



写真1 小学生でのコンポスト授業風景

■事業概要

コンポスト普及啓発事業、
コンポスト人材養成・支援事業（国内外）、
半農都会人講座、地産型堆肥化事業（落ち葉・雑草・農業残渣・海藻アオサ・松葉）、
小さな循環ファーム

■活動内容

地域内で暮らしに必要なものが循環する豊かで創造的な暮らしを循環生活と定義し、そのための堆肥化の適正技術を広めています。各家庭で簡単に取り組みえるコンポスト（生ごみ・落ち葉・雑草・せん定葉）や、地域の有機性廃棄物（農業残渣・海藻・松など）の堆肥化技術の研究・普及・実践活動を実施しています。第一歩として、都会人でも気軽にベランダで取り組みえるダンボールコンポストを2000年から約10年かけて改良・開発。ベランダで生ごみを堆肥化できることに



写真2 年間約30か国の人々が研修に来所するより、都市部での資源循環のツールとして事業を拡大し、他地域やアジアへは人材養成・支援やノウハウ移転事業として展開しています。現在は賛同者、仲間も全国に広がって、年間80,000人に伝える体制づくりができました。住民が生活圏と感じ、移動コストもかからない「半径2kmでの小さな資源循環システム」の構築を住民と農家、商店、学校、行政などと現在連携をおこなっています。

■今、取り組んでいること。

地域の人が、身の回りにあるモノを「資源」だと認識し、大切に循環させることで、豊かで創造的な地域暮らしができる。しかも、地域の人が社会を構築していくのは私たちなのだと、自分ゴトとして捉えるにはどうしたらいいのか、悩みました。私の半径2kmは、徒歩や自転車で楽に動ける範囲です。小学校区では2～3校区、病院やスーパー、郵便局、銀行など基本的な暮らしに困りません。まさに主婦が感じる生活圏なのです。活動当初より半径2kmを一つの暮らしの単



写真3 半農社会人講座

位として仮定しています。その後、半径2kmが地産地消の定理や、高齢者のデイケアなどの送迎であるということなど、次々に確信する材料が追加されてきたのです。

ビジネス的にみると、大きな循環が効率的で大きなお金も動くので、いいように感じますが、この大きな循環で失うものの、つまり、移動で使う大切な資源、時間、地域の会話、顔が見える活動。そして何より自分ゴトではなく、ヒトゴトになってしまうことが問題なのです。自分ゴトと捉えることが、小さな循環の叶う豊かな暮らしづくりを現実化し、このことによって世の中が動き出すと確信しています。現在、資源化100研究会と実践活動を並行して稼働しています。若者から高齢者まで活き活きと働ける共助社会の中で、生ごみが資源として大切に取扱われる社会、アウトラインをさまざまな

循環生活研究所 活動の経緯

- ・1997年 コンポスト普及活動開始
- ・2001年 ダンボールコンポスト講座開始
- ・2005年 ダンボールコンポスト人材養成・支援事業開始（内閣府事業）
- ・2007年 3NPO（土・水・紙）で、ベッタ会発足
海藻アオサの堆肥化開始
- ・2008年 小さな循環ファーム事業、日本環境保全ボランティアネットワーク発足
- ・2010年 ネパールへノウハウ移転事業
半農都会人講座開始（写真3）
- ・2011年 アジア3R推進市民ネットワーク
海外NGOとの連携開始
- ・2016年 生ごみ資源化100プロジェクト開始（写真4）

受賞歴 2007年福岡市環境行動優秀賞、地球環境映像祭子どもアースビジョン賞、2009年福岡県社会貢献活動表彰受賞、福岡県減CO₂九州環境局長賞、経済産業省ソーシャルビジネス55選、2012年福岡県循環型社会3R推進表彰、2013年福岡地域づくり活動表彰グランプリ、2014年福岡県共働社会づくり活動表彰、地域づくり総務大臣表彰

セクターで協力しながら描きはじめています。

■循環研が描く未来

生ごみを捨てずに資源として活用する社会、生ごみは焼却されることなく、資源として取り扱われ、コンポスト化、飼料化として半径2km圏内もしくは近郊地域で活用される、循環野菜が嗜好され、街角で買うことができる街を、循環研は目指しています。



写真4 生ごみ資源化100研究会

第26回研究発表会

食品ロスと子どもの貧困

NPO法人 フードバンク北九州ライフアゲイン 理事長 はらだ まさき 原田 昌樹

NPO法人 フードバンク北九州ライフアゲイン代表の原田昌樹と申します。

私たちのミッションとビジョンをお伝えすることから始めたいと思います。

ミッション

「将来、子どもたちが、われわれの事業を通して、環境に左右されず、社会を担える大人へと成長できるようサポートすること」

ビジョン

「フードバンク事業を通して、食べ物を大切に作る心を育てるとともに、貧困と孤立によって、食べられない、働けない、教育が受けられない人々をひとりも生み出さない、誰もが尊厳をもって『その人らしい』生活を営む事が出来る地域社会の実現」

「食べ物のいのちは人のいのちにつな

がっている」…このスローガンは私の直面してきた体験から生まれた言葉です。私は今までファミリーサポートの働きをし、家庭に戻れない人々の支援をしてきました。その中で某企業のご好意により食料をいただくようになりました。その中で食品が大量に廃棄されている現実に出会い、まだ食べられる食品を廃棄する社会構造は、弱者を切り捨てる社会を映し出しているように思えたのです。



写真1 熊本地震の食料支援に向かうメンバー